

*** 観測の際使っていたテレラジカセを収蔵**

筆者は、東京天文台時代の1973～1981年の8年間、三鷹にあった卯酉儀と呼ばれた30cm反射望遠鏡を占有して変光星、新星等の3色光電測光観測をしていた。口径が30cmと小さかったので変光星の暗いフェーズの時は堂平観測所の91cm望遠鏡を使っていた。この観測をやっていた最後の頃、テレビの天気予報を見るために使っていたのがテレラジカセ(写真1)であった。天気予報はわずかな時間だが、観測しながらニュース、歌謡番組を聞いたりしていたが、観測中なのでラジオが主で、好きな音楽が流れるとカセットテープに録音して何度も聞きながら観測をしていた。アーカイブ室新聞324号にも書いたが、三鷹の11月から3月にかけては世界有数の天気のいい地域で、夜の長さは14時間もあった。



写真1 観測時に使っていたテレラジカセ

筆者は、昭和56年(1981年)恒星分類部から太陽物理部に移動し、この3色光電観測は終わった。当時、Astro-Aという太陽観測衛星が軌道に乗り「ひのとり」と命名され、その

運用要員として、また、東京天文台の大気圏外観測、即ち宇宙開発部門であった西教授の真空紫外分光実験室担当としての配置換えであった。これは、最初に就職した岡山天体物理観測所で真空蒸着装置を任せられ、日本真空の技術者から真空技術を習得していたことから、この引き抜きが起きたようであった。

ラジカセは一般的であったが、それにテレビが加わったテレラジカセは珍しかった。長く、寒い夜、独楽鼠のように狭いドーム内を動き回る観測を楽しくしてくれる道具だった。

そのテレラジカセが、2010年になって筆者の手に戻ってきた。ほぼ30年ぶりである。筆者がいた恒星分類部は国立天文台になった際、改組があり光学赤外線天文学研究系恒星物理部門とかになったが、その部門の末裔の雑事を引き受けていた御仁がこの3月末で定年になり、捨てられずに残っていたテレラジカセを収蔵することが出来た。筆者にとっては懐かしいもので、今、アーカイブの仕事をしているのも奇妙な縁である。写真2が本体の主要部である。



写真2 テレラジカセの主要部

このテレラジカセはテレビの1~12チャンネル、ラジオのFM、AM、SM、カセットレコーダーと当時としてはオールインワンであった。